

## 6 派遣職員メッセージ

## 6 派遣職員メッセージ

震災支援本部では、北九州市立文学館との協力で、被災地へ派遣された全職員を対象にメッセージを募集しました。

寄せられたメッセージの一部は北九州市立文学館にて企画展「3.11から2年 いま、伝えたいこと—北九州市職員たちの復興支援」として、パネル展示されました。

ここでは、寄せられた全てのメッセージを掲載いたします。

北九州市制50周年記念 全国文学館協議会「文学と天災地変」共同企画

### 言葉と写真のパネル展

# 3.11から2年 いま、伝えたいこと

—北九州市職員たちの復興支援—

2013年3月1日(金)～3月31日(日)



会場 北九州市立文学館  
開館 平日／9:30～19:00 土日祝／9:30～18:00 [入館は閉館の30分前まで]  
休館 月曜日  
入館料 一般200円 中高生100円 小学生50円

※ 年長者施設利用証提示者の割引は2割  
※ 療育手帳提示者、身体障害者手帳提示者、精神障害者保健福祉手帳提示者及び付添人（身体障害者の方の付添は本人が4歳以上）は無料  
※ 下関市介護保険被保険者証、公的機関が発行した福岡市、熊本市、鹿児島市の65歳以上の市民であることを確認できる証明書提示者の割引は2割

問合せ 北九州市立文学館 〒803-0813 北九州市小倉北区内 4-1 TEL:093-571-1505 Fax:093-571-1525

主催：北九州市立文学館 協力：北九州市危機管理室

順不同・敬称略とさせていただきます。

## 「失くしたものの、そして得たもの」

緊急消防援助隊救助部隊の一員として被災地へ派遣されたのは、もう二年も前。しかし、たった二年前。相反する想いが私の中にある。

現地での惨状を前に、胸に去来するのは果てしない絶望感と虚無感。それでも一縷の望みを手に、生存者を探す。この悲劇で奪われたものはあまりにも多く、そして二度と、戻りはしない。しかし我々は負けない。なぜなら失くしたものと同時に得たものがあるから。

支援に向かったはずの被災地で、助けるべき被災者から頂いた「ご苦労様」「がんばって」の一言に沸き立つ力。避難所で老若男女を問わず、助け合い、支え合って懸命に生きる人たち。人は繋がり、助け合い、支え合える。そんな「絆」が、忌むべき災害に負けるはずがない。そう確信した。

繋がろう。助け合おう。支え合おう。

自然は驚異である。災害は無慈悲である。しかし我々は負けない。我々が得たのは、燦々と輝く「絆」なのだ。

八幡東消防署警防課 朝吹 直也

## 「今、自分に出来ること」

それは見渡す限りの荒野。

泥にまみれた大災害の爪痕が目下に広がり、「絶望」という現実を突きつける。

私たちが立つこの大地に、今一度「希望」という息吹を吹き込むように、我々は救出活動に尽力した。家族のもとに帰れないでいる被災者を思い懸命の活動を続けたが、望みはかなわず、遺体を家族の元へ帰す結果となった。

あれから二年……

今も震災は終わっていない。

未だ、戻らぬ家族を想い、心を痛めている人々がいる。

愛する人がある日突然帰ってきてくれたら……と想い偲ぶ人々がいる。

私が今、被災者の方々のためにできること……

それは、被災地で見たこと、感じたことを一人でも多くの人に伝え、震災という大災害について考えてもらうこと。

そして、愛する人を、愛する家族を守る術を学んでもらうこと。

復興に向けた行動を起こしてもらうこと。

私は、それを切に願う。

あの日見た現実と、被災者の胸に焼かれた痛みを忘れることなく、被災者の方々の心と被災地の一日も早い復興を願う。

八幡東消防署警防課 飯野 大祐

### 「3・11から2年、今伝えたいこと」

決して忘れられない、忘れてはならない3・11の東日本大震災から早2年が経とうとしています。

私達は被災直後の2日目から支援に入りました。その悲惨な光景は今でも鮮明に覚えています。

電気はなく断水し、雪がまだ残る体育館に段ボールを敷いて数枚の毛布で朝を迎えたこと。上空から目にする景色は民家がほとんどない瓦礫の山。途方に暮れ、声も出ない惨状でした。人命救助の使命が、日が経つにつれ、行方不明者の捜索へと変わっていく。希望から絶望へと任務の重圧を肌で感じた次第です。

この支援を通じて皆様に伝えたいことは、震災は決して他人事ではないということを一人一人がしっかり自覚するという事です。そして日頃から訓練を行い、先ず個人が身を守る（命を守る）行動がとれるようになる事、これが一番重要と考えます。

最後に被災地の方を通じて、非常時においてもなお、お互いを思いやる精神を忘れてはならないという事を学びました。

『取り合えば足らず、分け合えば余る』（100歳詩人柴田トヨ）

消防局警防部消防航空隊 井口 卓也



## 「東日本大震災災害派遣を振り返り」

平成二十三年三月十一日、テレビの画面には想像を絶する光景が広がっていた。この光景を見た日本中の消防隊員は、救出活動をおこなうため被災地に出動したいと思ったに違いない。私自身もそうであった。

被災地到着までに四日間を費やし、派遣場所に到着した。そこには、さまざまな恩恵をもたらしてくれるはずの美しい海が突如として襲いかかり、瓦礫と土だけの茶色の世界が広がっていた。活動現場からはその海が見え、余震が起こるたびに恐怖を感じた。この状況の中、被災地の消防隊員は、懸命に行方不明者の搜索活動をつづけていた。その消防隊員の多くは、自分の家族との連絡がとれていなかった。また、町役場で避難生活を送っていた被災者から「お腹がすいているだろ？パンを持ってきてあげよう。」と声をかけられた。人の強さや、人を思いやる優しさに涙がこぼれそうになった。

帰路の途中、阪神淡路大震災に出動した上司から「震災から十年たった西宮駅を降りたとき、見事に復興した姿を見た瞬間、涙が止まらなかった。」と聞かせてくれた。その日が一日でも早く来ることを願っている。

門司消防署警防課 河崎 優

## 「出発点」

あまりに「非日常的」で寒さなど感じない。

水溜りは凍っている。

被災地での活動初日、平成二十三年三月十八日午前八時五〇分のことである。我々が活動拠点とする現場指揮本部の近くに小高い丘があった。その周り一面の住宅は津波に打ちのめされて原型がない。丘といってもそんなに大きな丘ではなく、高さにして十メートル程のものだ。頂上付近には、地震に耐えた立木が傾斜して突っ立っている。私は「自分自身の危機管理」と真っ先にその丘に駆け上がって辺りを見回した。本音は「あれ（津波）がもう一度来たなら自分は助かるだろうか？」「ここに駆け上って逃げればよい。」と安心感を得たかったのである。しかしよく考えると、とてもこの高さでは間に合わないとわかり、同時に誰よりも先に助かろうと思った自分を恥じて覚悟を決めた。

「想定外」の出来事というのは、人間の心の片隅に誰にでもあるらしい。しかしそうなることが怖いから現実から逃げて「想定外」としている。はたして我々が収容したご遺体やご遺族の方々に「想定外だったから」とそんな言い訳が出来るであろうか。

この震災が、新たな危機管理の「出発点」だと信じている。

小倉北消防署警防課 北里 浩二



## 「派遣職員二年後の手記」

堤防を一気に乗り越え、市街地を飲み込み、田畑をまるで巨大な生き物のように蹂躪した、あの大津波をテレビ画像で目にしてからまもなく2年を迎える。

北九州市緊急消防援助隊として、東日本大震災発生から3日後に北九州市を出発し、支援活動に赴いた。

陸上部隊であった我々は遠隔地からの出動ということで現地での活動は4日間であったが、現地の筆舌に尽くしがたい悲惨な状況を決して忘れることは出来ない。

帰北後、現地支援活動の体験を生かして、市民の方に地震や防災についての話をする機会が何度かあった。

正直なところ、地震発生から時間が経過するにつれて、市民の反応が鈍くなった気がする。次の大地震の発生が高い確率で予想され、北九州にも大きな影響を与えると考えられる今、もう一度市民の方に「防災、減災」を訴えなければならない。

派遣先から北九州空港に到着した2年前、ふるさと北九州がいつもと同じ風景でいることに派遣隊員全員が安心した。

必ず襲ってくるであろう災害から、ふるさとを、家族を守りたいと強く感じた一瞬であった。

小倉北消防署警防課 古賀 朋之

## 「被災地を思う」

「お父さん、保育園にお金もっていかな。」と息子が言うので、「なんで」と聞くと、「津波で流された保育園のために」と言う。私は何がなんだかわからず、保育園にいくと、事務所に募金箱がありました。それは、釜石市の保育園が津波被害により全壊し、その復旧支援のための募金でした。

平成二十三年三月十一日十四時四六分東北地方で大きな地震の発生とともに押し寄せる津波、各地で発生している火災など、本当に日本で起きていることなのかと疑うような映像を目にしました。それから数日後、北九州市消防局にも災害派遣の要請があり、私はその一員として、宮城県亘理郡山元町へ数日かけて陸路で移動しました。

また、昨年十月には宮城県陸前高田市を訪れた際には、発災から一年半が経ったにもかかわらず、津波が残した爪跡がいまだにそのままであり、街には復旧工事を行う重機と瓦礫の山をあちこちで目にしました。

街は復興へ向かいますが、亡くなった命は戻りません。いつ私たちの街北九州が被災地となるか…。そのためにもみんなで考え、行動していきましょう。

消防局警防部警防課 鋤崎 真一

## 「今までも、これからも」

「東北地方で大きな地震がありました。」と第一報を航空隊事務所で聞き、消防庁から出動要請が来てからの準備と出動、そして被災地域での活動から帰隊まで、震災から二年経った今でも全ての事が鮮明に思い出されます。

大阪出身の私も平成七年の阪神淡路大震災を経験しました。兵庫県在住の親戚もライフラインが絶たれ、生活物資の不足が続きましたが、その支援を精一杯したことを思い出します。

それから十六年、地震に対する心構えはしていたつもりですが、想像をはるかに上回る災害状況に言葉も出ませんでした。被災地での活動も、あまりにも広範囲に被害が及んでいたため困難を極めました。

そのような状況の中、現地一般市民の方から、「遠方からありがとうございます」と感謝の言葉を頂き、北九州市でも市民の方から「私たちの分まで頑張ってください」と励ましの言葉をいただくことが多く、これはかつて震災を経験した私自身の言葉であったことを思い出しました。その当時も、感謝の気持ちと人を思いやる気持ちがあったからこそ、私たちの元気と気力を維持することができました。

以前とは立場や状況は違っても、思いやりの気持ちと言葉が人を支え、一日も早い完全復興に繋がると信じています。まだまだ大変な状況が続いていると思います。力不足ではありますが遠方から様々な面で協力していきたいと思います。

消防局警防部消防航空隊 松本 尚樹



## 「北九州市から救われた心」

私は消防航空隊として東日本大震災に出動しました。空から見た被害状況は北九州から鹿児島までの東海岸全て、津波で消滅したイメージです。ニュースには出てこない小さな村や島、街、それぞれの人が持っていた人生、それが全て消滅した……。そんな感じでした。

消滅した、でもそれは同時に想像を遥かに超える瓦礫が発生したという事実でした。その光景を上空から見たとき、「この瓦礫どうやって処理するのだろう、瓦礫の処理には多分二〇年は掛かるな……。」

被災地復興の妨げは間違いなく上空から見たあの広範囲の瓦礫です。

月日が経ち北九州市は震災瓦礫の受け入れを決めました。反対意見もありましたが私は、「よくぞ九州から手を挙げてくれた」と思いました。私の心の何処かに震災瓦礫の事が引っ掛かっていたのだと思います。

復興支援という形ではなかなか消防という職種は関係することができず、胸の内がどんよりと曇った状態でしたが受け入れが決まった時、「私の胸の内を北九州市が代弁してくれた。」そんな気分になりました。

困ったときに手を差し伸べる北九州市、その市民として私は生活しているのだと思うと誇らしく幸せな気分になると同時に被災地に出動した私達の心も救ってくれたと思います。

消防局警防部消防航空隊 諸泉 幸次

## 「三・一一から二年 いま、伝えたいこと」

三・一一東日本大震災。

あの衝撃的な出来事が起こってはや2年が過ぎました。

震災があった翌朝、日の出とともに消防ヘリコプターにて北九州空港を離陸、被災地へ向かいました。数時間後、眼下に広がる被災地は、すべてのものが津波により根こそぎ破壊されていました。

あの時の衝撃は今でも忘れません。

被災地での活動は、今の私の大きな経験となり心のなかへ刻まれました。

北九州市をはじめ今なお、各分野において被災地への復興支援が行われています。

私自身被災地に赴き現地で活動した者として、今までも被災地で得た経験を通し多くの方々へ三・一一の出来事を伝えてきました。

今回この寄稿を通じ私を含む一人でも多くの方々が、三・一一のあの出来事を振り返り、あの時感じたことや思ったことを思い返す機会へと繋げていただければ幸いです。

最後に、今もまだ復興にむけ日々尽力されているの方々へ敬意を表すとともに、被災地が一日も早く復興することを切に願います。

八幡西消防署警防課 吉永 剛志



## 「釜石からの手紙」

前略、北九州市の皆様。

三月に入り、窓からの日差しや気温の変化から長い冬の終わりが近いことを感じていますが、小生、釜石で二度目の春を迎えようとしています。

一昨年(2011年)の8月、生まれて初めて足を踏み入れた釜石はガレキが散乱し、テレビで見るより凄惨な被災状況で、言葉を失ったことを鮮明に記憶しています。

忌まわしい震災から二年を迎えた現在、ガレキや津波の痕跡を色濃く残していた建物は撤去され、新たなまちづくりが本格的に始まろうとしています。

一方、いまだに150名を超える市民が行方不明であり、身内を失ったご遺族の中には気持ちの整理がつかず、復興に想いが及ばない方もいらっしゃるようです。

釜石にいと、震災や復興に関する報道を耳にしない日はありませんが、北九州市ではずいぶん少なくなると聞きます。

まち全体が震災前の姿を取り戻すまでには長い歳月を必要としますが、多くの北九州市民の釜石への暖かな気持ちが被災者の大きな支えになることは間違いありません。

どうかこれからも北九州市の皆様が、釜石だけでなく被災地全体に想いを巡らせ続けることを切にお願いいたします。 草々。 北九州市・釜石デスク 東義浩

## 「復興の道半ばで逝った友へ」

一昨年(2011年)の8月、縁もゆかりもない釜石に赴任した小生を気遣い、すぐに声をかけてくれたのは貴君でしたね。

自主的に参加するセミナーで北九州市の話題を耳にして以来、北九州のまちや人に憧れていると目を輝かせて話す姿に、ちょっぴり気恥ずかしかったことを記憶しています。

学生時代、近隣に知れ渡ったラグビー選手だった貴君は、持ち前の突破力で多方面にアンテナを張り、復興にあたって中心的な役割を担っていましたね。

そんな貴君が昨夏に何の前触れもなく逝ってしまったことはいまだに信じられません。

悲報に接する直前、「近々一杯やりませんか？」とお誘いいただきましたが、二度と杯を交わすことができなくなり残念でなりません。

空の上から眺めていると、復興がなかなか進まずもどかしい気持ちでいっぱいでしょうね。しかし、貴君の同僚達は、震災復興というとてつもなく困難な相手に対スクラムを組み、歯を食いしばりながら挑んでいます。

どうかこれからも続く復興に向けた真剣勝負を空の上から叱咤激励してください。

貴君の愛した釜石は、きっと素晴らしいまちに生まれ変わることでしょう。

北九州市・釜石デスク 東義浩

## 「寄り添うこと」

私たち児童心理司二名は、震災から約五〇日目に宮城県東部児童相談所（石巻市）に派遣され、避難所の巡回訪問と出前保育所の同行、先々での被災児童や保護者との面談などに従事しました。

被災状況も避難場所の環境も場所により大きく異なりますが、多くの住民が目の前の圧倒的な現実とさまざまな感情とが入り乱れたままで、それでも何とか平静を保っているようでした。

特に体育館のように大規模の避難所では、頻繁に支援者や支援物資の出入りが激しく、一人になり本当に落ち着くのは難しい状態です。赤ちゃんも異常を感じているのか寝つきが悪く、泣き出して困っているとお母さん。

支援者である私も、今までにない惨状に圧倒され心が揺さぶられます。たんとんと寄り添うことができるのは非当事者だからできる大切な役割なのですが、簡単ではありません。激しく混乱した状況や、語られる話に心が巻き込まそうになるのを抑えるだけで精一杯でした。

「普段できること以上のことはできない」を忘れずに日常の業務に取り組んでいきたいと思いました。

子ども家庭局子ども総合センター判定係 児童心理司 市丸信樹

## 「釜石市にて仲良くなった友達からの伝言」

釜石市にはラグーマンが多い。何歳になってもラグビーをしている。私の友達もやはりラグーマン。ラグビーを愛する男は気持ちが良い。「ワンフォアオール」「オールフォアワン」いつもこの精神を持ち、生きているから。

彼には無二の親友がいた。沢山の親友の中でも一番大切にしていた親友。昔から一緒にボールを追い、苦労を共にしてきた親友。親友は陸前高田市に住んでいて、彼の自宅からは車で三〇分程の距離。「いつでも会える」そんな距離。だから彼らは頻繁に会うことはなかった。「いつでも会える」からいつも会ってなかった。正月も夏も、三年会ってなかった。でも、それって普通。

親友は、あの日津波にのまれ亡くなった。もう彼は、親友とは会うことができない。

だから彼は私に言った。

「大事な友達には用事が無くても会いなさい。そしてこれをあなたの知り合い達に伝えて欲しい」と。

八幡西区国保年金課 岩本 良太

## 「心やさしい方々が二度と大津波で被災しないように」

六月二十七日から約三週間、市民課業務応援の第一班員として釜石市に派遣されました震災から三ヶ月を経過して、行方不明者についても死亡届出ができる特別措置が始まった直後でした。

最初に受けた死亡届は、「家族が心配」と言い残して職場を飛び出して自宅近くで行方不明になった父と、隣村の老祖父母を連れて避難途中で被災された母について、遺された娘さんから届け出られたもの。お話を伺っていて、涙が抑え切れませんでした。

さらに、海辺で仕事をする父を「大津波が来る。逃げろ」と呼びに行き、父とともに津波に呑まれた息子について母から届出。隣人を助けようと手を差し伸べたまま津波に呑まれた夫について妻から届出。……。極限状態の中で、家族や隣人を救おうとして被災された方々が何と多かったことか、押しつぶされそうでした。

三陸沿岸では明治以降だけでも四回の大津波に被災されたとのこと。心やさしい方々が二度とこのような悲劇に見舞われないよう、国をあげて取り組まなければと、心から願います。

市民文化スポーツ局区政事務センター 桑田秀信

## 「二つの大災害に携わって」

私が最初の大災害に携わったのは1995年1月17日の「阪神淡路大震災」でした。朝、出勤前のTVを見ていてこれは大変な事が起こったと思いました。

早速、市の山岳部を中心にして緊急派遣隊が編成されました。山岳部なら宿泊・食糧の自給など完結型の組織という理由です。私も応募し、市営バスで夜間走行し神戸市に到着しました。そこは、一面焼け野原で、焼け残っていても全面倒壊の家屋ばかりでした。

早速、神戸市の区役所と打合せし、当面すぐできる支援について話し合いました。押し掛け救援で、相手も混乱状況なので事前の打合せは不可能でした。そこで、お願いされたのが避難所の運営でした。神戸市の職員はやるべき事が山積みで、とても避難所の運営までは無理な様子でした。自分も被災している神戸市の職員が、辛さを隠し懸命に使命を果たしている姿に涙したことを思い出します。

この時の北九州市の教訓が2011年3月の「東北大震災」に生かされたことは間違いありません。私は釜石の体育館で避難所の運営を支援しました。奇しくも二つの大震災に関わったことは不思議な気がしました。

2つの大災害の現場で感じたことは、被災者の秩序だった行動でした。

自分も大変なのに他人を思いやる人が沢山いました。

数年前に神戸に行く機会がありました。驚いたことに震災の跡は全くなく、その復興振りは目を見張るものがありました。

東北が一日も早く復興できることを願ってやみません。

産業経済局競艇事務所 五島 近夫

## 「天災」

トンネルを抜けて釜石の町に入る  
どこにでもある山あいの町並みがつづく  
しかし、海に近づくと光景が一変する

壊れた鉄橋、道路、ビル  
根こそぎなくなった家の跡  
潰れた車が積んでいる山  
岸壁にぶつかったタンカー  
テレビで見た光景がそのまま広がる

思考が停止する  
自然の猛威に圧倒される  
自分一人で何ができるというのか

いや、しなければいけない  
できることをしなければならぬ  
小さな積み重ねが復興に繋がることを信じて

市民文化スポーツ局文学館 竹下 英俊

## 「忘れないで欲しい」

被災地の人からよく聴いた言葉は、  
「この大震災のことを忘れないで欲しい」。

なぜなら、全国からの励ましに支えられて、  
絶望の淵から復興を目指しているが、  
忘れられると頑張る気持ちが消えてしまいそうだと。

建築都市局都市計画課 宮崎 賢一



## 「被災地の支援を通じて感じたこと ～幸せとは～」

私は、平成二十三年七月、戸籍・住民票業務支援として釜石市役所市民課へ十九日間派遣された。震災で亡くなられた方の死亡届提出のピークは越えていたが、戸籍を取りに来る被災者の方は多かった。業務中、しばしば<sup>うのすまい</sup>鵜住居という地名が出てきた。そこで、休日にバスに乗って鵜住居へ出掛けてみた。派遣当時市民課があった釜石駅周辺とは異なり、鵜住居は何もかも津波によって流されていた。ここにいた人はどうなったのだろう。そう考えると涙が止まらなかった。またある日、市民課へ女子高生が一人で戸籍を取りに来た。帰った後で派遣先の係長に聞いてみると、他の家族全員津波に流され、彼女だけが生き残ったと言うこと。これを聞いて言葉も出なかった。

被災地へ行って強く感じたことは、私達が日ごろ何気ない日常を過ごしていることが、実はどれだけ幸せであるかと言うこと。また、釜石市役所の職員は自分自身が被災しているのにも関わらず、市民のために献身的に働いていた。その姿を見ていると、逆に私の方が頑張らないと、と励まされた。

被災地の復興には多くの年月が必要である。被災地のことを忘れることなく、長期間支援を続けていきたい。

子ども家庭局子ども家庭部児童文化科学館 山下 靖生



## 「被災地の市役所の現場」

「北九州の方のおかげで、ようやく週末1日休めるようになりました」。

こう口をそろえたのは疲労の色濃い釜石市役所市民課の女性職員たちだった。震災から3か月たった頃から始まった北九州市の釜石市市民課支援派遣。このとき現地窓口には平時の3年分にも上る死亡届の山が積み上げられ、さらには仮設住宅への転居、流された車の代車購入、亡くなった親族の保険手続きなどのため戸籍や住民票、印鑑証明を求める被災者でごった返していた。自らも被災者である釜石の女性職員たちは震災以降、歯を食いしばって悲しみをこらえ、昼夜を問わず土日もなく詰め掛ける被災者のために働き続けていた。

震災からもうすぐ2年。報道の扱いが小さくなると被災地への意識は次第に薄くなっていく。でも現実の被災地はまだ戦っている最中である。いま私たちに必要なことは被災地のことを忘れないこと、そして細くても息の長い支援を続けることであるように思う。

八幡東区市民課 森本 康成

## 「忘れないで…～被災地の今～」

私は、被災地釜石市で住民の健康づくりやメンタルケア等の仕事をしています。

釜石市では、今でも余震は毎日のように続いており、津波注意報も度々発令されています。

街の景色も瓦礫の撤去は進んだものの、津波で建物が流された後の、基礎だけ残る空き地が広がっているままになっています。被災から2年、ずっと止まらずに全力で走り続けてきた被災地の方々も、疲弊しています。でも、立ち止まる事はできず、前に進むしかない・・・と頑張り続けています。頑張りすぎて、力尽きて、自ら「死」を選ぶ方も出てきています。

被災地では、震災は過去のものではなく、現在進行形なのです。

どうか、被災地の方々の頑張りが報われますように・・・

そして、私達は、時が流れて、被災地の復興が進み町の景観が変わっても、東日本大震災という大きな試練がおこり、それに立ち向かった被災地の方々の前向きな頑張りを決して忘れることがないように大切に思い続けていかなければいけないと思います。

保健師 河津 博美

## 「東日本大震災救助部隊長の活動記憶」

3.11の発災と同時に全国から救援を待つ人々の元へ、地域を越えて捜索救助活動に向かった。活動エリアで目に飛び込んだ光景が、あらゆる場所で倒壊している被害の状況が延々と続き、その被害の甚大さ、自然のもたらした猛威に私も隊員も絶句状態であった。しかし、同時に側道を歩く被災者の方々が手を振り、頭を下げている姿を目にし、救助隊としての使命感の重さを感じた瞬間であった。早朝から捜索救助活動開始、現場の大半は水没し瓦礫等の山で、泥水で水深が予測できない箇所もあった。「このエリアで我々の救助を待っている人たちがいる。」という思いを旨に捜索活動を続けたが、生存者は発見できず活動終了した。今回の派遣で献身的に最後まで我隊員と共に活動できたこと、また、誰一人怪我無く無事に北九州市に戻れたことに感謝している。今後、この未曾有の大災害に派遣した事は、我々本来の任務である「安全・安心」を築いていくために大きな経験となった。自然を前にして災害から逃れる事はできない。いかに「減災」「救助」できるか、生きている我々の使命である。

八幡西消防署警防課 江口 吉親

## 「命を守るために伝え続ける」

あの震災から、2年経過した今日でも、被災地や被災者は、未だ復興に向けての苦難の道を歩んでいます。今でも、被災地の凄惨な情景が、私の脳裏に焼きついています。

震災後から今日まで、「被災地での活動に従事した私たちにできることを」という一心の思いで、一人でも多くの市民の皆さんに啓発活動を実施してきました。「まさか！は起こり得る」という危機意識と防災の知識をしっかりと持つ、地震・火災・風水害等のあらゆる災害から命を守るための行動力を身につける、地域の力を強める、そして、備えをしておく等の大切さを伝えてきました。

今後も、「安全で安心なまちづくり」のためにも、時が経つにつれて風化することがないように伝え続けると共に、防災分野の専門家としての指導をしていかなければならないと感じています。それが、被災地に立った私たちの責務と思います。

被害を最小限に止め、命を守るために・・・

消防局警防部消防航空隊 小田 龍平

### 「3. 11 災害派遣から2年目の思い」

東日本大震災への災害派遣から2年の月日が過ぎた。最近、復興が進む被災地のニュースを目にすると、あの日、困難に立ち向かっていた人々の勇気や力の凄さを思い出す。個人や1つの組織は無力であっても、それらが結集することで生み出される力は偉大であることを改めて実感する。

色々なことを思い、考えることが多くあった災害派遣であったが、未曾有の災害を目の前にして、消防士である我々でさえも足がすくんだ。それでも、各自が使命感に燃え、責任を果たすべく全力を尽くし、十数名のご遺体を家族のもとに帰すことができた。最近、我々の僅かながらの活動もその一端を担えたのかもしれないと思えるようになってきた。

1,000年に1度とも言われる大災害が僅か16年間に2度も発生している。このことは「何時如何なる場所で発生するかわからない災害に対して常に備えておくこと。」この防災の原点とも言える思いを現実ものとして教えてくれた。

もし3度目があるならば、いや明日あるかもしれないと思い、そのために日々備えること、そして何よりも今回の経験を基にその意識を継続し継承していくことが、災害を経験した我々の、あの日遠くから被災地を見守っていた全市民の責任だと思う。

八幡東消防署警防課 小田 晋

### 「東日本大震災派遣を通じて」

私は平成23年3月14日から3月21日まで福岡県緊急消防援助隊陸上部隊として宮城県亶理郡山元町に派遣され、後方支援活動及び救助活動を行いました。現地は津波により甚大な被害を受けており、被災された方々の事を思うと胸が締め付けられる思いでいっぱいになった事を今でも昨日のように思い出します。

活動は広範囲の検索、津波による浸水及び多数の障害物で困難を極め、残念ながら生存者を発見することはできませんでしたが、12名のご遺体をご家族の元へ帰すことができました。

活動を通じ私が感じたことは、いつ襲ってくるかわからない災害から愛すべき人々、愛すべき街を守るためには、この経験で感じた悲しみ、自分の無力さ、命の儂さなどの思い全てを私の力に変え、自分自身もっと強くならなければならないということです。私はこの決意を貫き、愛すべき人々、愛すべき街を災害から守れるように努力を重ねていきたいと思えます。最後に被災者の方々に心からお見舞い申し上げますと共に犠牲となられた方々に哀悼の意を深く表し被災地の1日も早い復興を祈念いたします。

小倉南消防署警防課 川畑 敬一郎



## 「被災地での活動を終えての決意」

発災から6日後の3月17日、宮城県亶理郡に到着した。正直な第一印象は、この津波災害のあった箇所に生存者はいるのであろうかという思いであった。消防の使命は生存者救出である。活動当初、その思いが成し遂げられない悔しさが先行した。しかし、被災したにも関わらず昼夜を問わず活動し続ける現地の消防職員の姿を見ると、その思いは自分勝手であるとわかった。生存者救出という結果に結びつかなくとも要救助者をどんな状態であれ、家族の手元に戻したい、少しでも現地消防職員の役に立ちたいと心底思った。

派遣以前、以後では仕事はもちろん普段の行動、物事の考え方が変わった。それは想定を超えた大震災派遣での想像を超えた人の温かさを感じたからだと確信している。現地消防職員、被災された方々から労いや励ましを受けたことが強く心に刻まれている。

今回の派遣経験を活かし、来るべき大規模災害をはじめ、今後起こり得るあらゆる災害に全力で立ち向かい、最後まであきらめず活動することが自分の責務である。

八幡東消防署警防課 久保 秀樹

## 「東日本大震災に派遣され」

平成23年3月11日14時46分、東北地方太平洋沖地震が発生し、14日午後、緊急消防援助隊が招集され、和布刈パーキングに集結した。夕刻に出発し、深夜、岡山県に到着し野営することとなったが、地震発生から3日経過していることから、一刻も早く被災地で活動したいという気持ちで一杯であった。

17日午後、宮城県亶理町に到着したが、途中、福島原発事故の放射能汚染のため測定を行い、現地に向かったことなど過去に経験しなかったことばかりであった。

翌日、亶理郡山元町の被災状況を視察した。建物は全て津波で流され残存していない状況にいたたまれない気持ちであった。途中、瓦礫を取り除いていた高齢の女性から、捜索状況を尋ねられ、終えていない旨を伝えると、礼を述べられ涙を流していたことが非常に辛く感じた。

現地到着から引揚げまでの支援活動について、隊員が活動に専念できるよう各隊の行動に合わせ食・住の管理を行ったが、改めて支援隊の重要性を感じたところであった。

最後に、この震災で亡くなられた方、未だ行方不明の方に対しご冥福をお祈りいたしますと共に、派遣され共に活動した隊員に感謝を申し上げたいと思います。

小倉南消防署警防課 田淵 良二

### 「3.11から2年 いま、伝えたいこと」

私たちは、緊急消防援助隊として宮城県山元町において、4日間の人命救助活動を行ったものの、残念ながら生存者を一人も救出することはできませんでした。東日本大震災による死者の約1万3千人のうち、溺死が9割の約1万2千人を占め、地震直後の大津波によって既に多くの方々が亡くなっていました。

このような体験から、今回の大震災において「命」を守るための最大の教訓は、世界一の堤防や防潮堤を安全・安心の拠りどころにするのではなく、「自分の命は自分で守る」ために行動することだと思いました。小中学生に対する防災教育の成果としての「釜石の奇跡」は、まさにこの具体的な例であり、この教訓を忘れてはならないと思います。しかし、大震災の教訓はこれだけではありません。

私たち日本人は明治以降、「関東大震災」と「阪神・淡路大震災」という大震災も経験しています。関東大震災の死者は10万人を超え、この9割の約9万人以上は焼死です。つまり、関東大震災の教訓は「地震直後の火災を防ぐ」ことでした。

一方、阪神・淡路大震災の死者は約6千5百人ですが、この8割の約5千人は木造家屋の倒壊による即死、1割の約6百人は室内家具の転倒による圧死と推定されています。つまり、阪神・淡路大震災の教訓は、「建物の耐震」と「室内における家具等の転倒防止」でした。

巨大地震対策では、もちろん津波対策は重要です。これに加えて、まずは地震発生直後の建物倒壊を防ぐこと、家具の転倒を防ぐこと、そして、揺れが収まったら火災を防止することなど、「自分の命は自分で守る」ための準備と行動をしなければなりません。私たちは、近い将来に発生するといわれている南海地震などの巨大地震に対して、これらのことも決して忘れてはならないと思うのです。

小倉南消防署 月成幸治

### 「東日本大震災を経験して」

平成23年3月11日発生の東日本大震災から、早2年が経とうとしている。

あの悲惨な災害により多くの人命を失い、今なお行方不明の方が多くいる。

3月14日、私は緊急消防援助隊の福岡県指揮隊として宮城県亘理郡に派遣された。

多くの人を救出するために行った現場は、家屋の瓦礫や車が津波で無残な形になっているなど、想像を絶する津波の破壊力に私は言葉を失った。

家族を探す被災者や川で洗濯をする被災者の姿があり、私たちを見ると深々と頭を下げられる姿に胸が詰まる思いがした。

被災地での活動で生存者を発見することはできなかったが、ご遺体を家族のもとへ帰すことができたことに対し、最低限の勤めができたと感じた。

北九州市で大災害があったとき、あなたは大丈夫ですか？

私は、これからも北九州市のために全力であらゆる災害と戦っていきます。

小倉北消防署警防課 原口 崇

## 「東日本大震災から二年の今思う事」

震災から二年が過ぎようとした今、被災地から離れた北九州というこの地で日々生活して行くうち、震災直後は震災関連の報道一色であったメディアも震災前とほとんど変わりなくなり、北九州市の宮城県石巻市からの震災がれきの受け入れ処理も今年度末で終了することが決定し、あたかも復興したかの様に錯覚してしまい震災が過去の事のような感覚を持ち始めている方も多いのではないのでしょうか。

正直なところ、震災直後に北九州市消防航空隊の一員として現地に入り微力ながら活動し、そこで自分の五感で「どこまでも続いている被災地」の惨状を身近に感じたにも係わらず、被災地と同じ「日本」という小さな島国の中で少し離れた土地で日々生活しているうちに、たったの二年なのにいつのまにか遠い過去の出来事のように感じてしまう時があります。

しかし、現地では原発事故も、震災復興も今起きている事であり決して過去の事ではありません。実際に現地に入り直接復興を支援する事は現実的には難しいですが、日々の生活の中で間接的にでも支援出来る事を考え実行する事が必要だと思っています。

消防局警防部消防航空隊 富士永 健治

## 「3. 11から2年 いま、伝えたいこと」

東日本大震災からまもなく二年が経とうとしています。あの時、全ての日本人が、テレビやインターネットで流れる津波被害とその惨状を眼に焼き付け「あのような大災害が自分や愛する家族の身に降りかかったら…」と想定したでしょう。また、その大半の人が何らかの手立てを考え、備えたに違いありません。

そして今、どれだけの人がその備えを継続し、災害に対する意識を持ち続けているのでしょうか。人は忘れる生き物だといえます。忘れれば意識は薄れ、油断します。しかし、地震に限らず、火災、水害等の災害は私たちの備えを待ってはくれません。当たり前を、突如として非日常へと塗り替えるのです。

私自身、実際に被災地に派遣され、ご遺体となった方を救出した時の悔しさ、見渡す限りの瓦礫を目の当たりにした時の愕然たる思いは帰北直後の強烈な感情と比べると多少薄れてきたのかもしれませんが。

しかし、我々はあの災害で得た経験や教訓を基に体制を整え、新たな資機材を整備し、訓練を重ね、常に新たな災害に備えています。

ともに備え、災害に強い北九州市をつくりましょう。

被災地の復興と震災で亡くなられた方々のご冥福を心からお祈りいたします。

八幡西消防署警防課 白尾 剛一郎

## 「東日本大震災・災害派遣を終えて」

私は、3月12日から3月23日までの12日間、岩手県と宮城県において、緊急消防援助隊航空部隊として消防ヘリによる救助活動を実施しました。

今回の災害派遣を経験し、被災地で活動する私たち隊員の装備や資器材の整備といった応援側の問題だけでなく、大規模災害時に応援部隊を受け入れる受援側の問題についてなど、いろいろな問題点を知る事になりました。

また、被災地で消防車両、防災ヘリ、自分達の装備などを津波に流されたのにもかかわらず、職務を遂行し続ける地元の消防士達の姿を目にしました。彼らの中には大切な家族や思い出の詰まった自宅などを流された人もいたと思います。しかし、彼らは家族の元にも返らず人命救助のために何日も働き続けていました。私は、彼らから消防士としてのとても強い「使命感」を感じました。

私は、今後どんな状況下においても「一人でも多くの命を救う」と強い使命感を持ち続けることができるよう、「心・技・体」の練磨に努めます。

東北で見たあの消防士達の姿を決して忘れません。

八幡西消防署警防課 本田 英樹





## 「東日本大震災から2年 いま、伝えたいこと」

2年前の3月11日・・・子供の卒業式・・・「今の当たり前の生活を当たり前とは思わず感謝の気持ちを忘れずに」と祝辞を述べたその日に東日本大震災が発生した。

この地震では、本震及び余震による建物の倒壊・地すべり・液状化現象などの直接的な被害のほか、津波、火災、そして、福島第一原子力発電所事故に伴う放射性物質漏れなどが発生し、東北地方を中心に甚大な被害をもたらした。

その結果、多くの人達が家、自分の街そして大事な思い出までも失い、多くの悲しみ、不安、後悔、寂しさ、怒りを生んだ。

あれから2年、未だに家族の元に返れない行方不明の方や被災した場所で亡くなられた家族に手を合わせ続ける人々、手付かずのままの街、当たり前の生活をすごせない人々、震災前まで当たり前だった日常生活を取り戻せないままの現実・・・

それは今もなお続いている。

国や本市を含めて地方自治体にとっては、まだ2年ではあるがあの日から支援を継続している。甚大な被害を受けた被災地の復興は、まだまだ長い年月と資金、そして人々の努力が必要だと思う。

勿論、私が被災地に派遣されて感じた

### ①安全で安心な街づくり

私達の暮らしの中で「安全で安心な街」であることは、最も基本的なことであり、大切なことである。など

### ②続的な支援の必要性

被災地には、国の支援も必要であるが、全国の地方自治体の継続した支援が必要であること。など

### ③決して忘れてはいけない

時間の経過とともに忘れてしまうことがないようにしなければならない。など

特に今1番大切な「決して忘れてはいけない」ことが、やはり時間経過とともに徐々に薄れて他人事になっているのは否定できない。今一度、私も含め皆で直接被災地への支援活動にならなくても、私達が日頃から出来ることを継続的に実行しましょう。決してあの日を忘れないために・・・

消防局警防部警防課 中禮 康久

## 「人は一人では生きられない」

私が釜石市支援を通じて感じたことは、「人は一人では生きられない」という当たり前のことでした。最後に頼りになるのはやはり人です。震災の日、人は集まり助け合い、夜を一緒に過ごして夜明けを待ちました。避難所でも不平不満を言わず役割分担して協力していました。最後に頼りになるのは人です。これから、日常生活での人とのつながりをもっと大切にしていきたいと思えます。

教育委員会指導第二課 山口直之

## 「あなたへ」

あの日がなければおそらくお会いすることはなかったでしょう。

初めはあいさつをかわすだけの春。

初めてきちんとお話した秋。急な訪問、急なお話、びっくりさせましたね。

1回目の北九州。冬の青空に元気なもじっ子とうみ(じ)ぼう(一)ず(も)がお出迎え。

すっかり仲良くなりました。

初夏の岩手。鉄の灯火ともる釜石(まち)。北九州の熊と茶夢(ちゃむ)でのご対面。

2回目の北九州。暑い熱い夏。あの日からの想いに触れてホロリと涙した夏。

3回目の北九州。ひびきのしらべにホッとした冬。

あなたとのご縁から本当に多くの方々と知り合うことができました。

これも太陽のようなあなたとひまわりのような私が出会ったから。

なんて言うのは素敵すぎますか？

今年はどうな出来事が待っているのでしょうかね。

またお会いしましょう。

(注釈)

※うみぼうず…門司区マスコット「じーも」

※茶夢…お店の名前。店主が釜石小学校避難所で毎日料理を作っていた。

※ひびき…詩のコンクールを受賞した児童「響くん」の朗読がモチーフ。

港湾空港局港営課 藏本 英司

## 「2年経過後の東日本大震災の隊員手記」

歴史と同様に、大きな地震などの震災も繰り返すということが、調査・研究等により判明してきました。

残念な事は、人は過去を忘れやすい生き物でありますので、今回の震災を今後に伝え続けることを大切にしたいと思います。

地球上のこの国に何故か生まれて、日本という名の国家の下で生活するなかで、人としてどう生きていくか。

人生観・価値観・幸福度は人それぞれに相違がありますが、被災された人達が、何を希望にして、何を目標にしているのか？を考え、現地の人々が納得するかたちの復興にしていけたらと思います。

個人的な意見としては、希望をもって未来に向い、悔いを残さないよう充実した毎日を生きていきたいと思っています。

消防局警防部消防航空隊 松本 竜郎

## 「応急給水活動」

高速道路を降りていわき市（小名浜地区）に入っても、いくつかのお宅で、ブロック塀が倒れていたり屋根瓦がずれていたり被害があったが、たいしたことないという感じだった。

しかし、海岸近くに行くと言葉も出ない風景だった。

つなみに襲われたと思われる所は土台だけ残して何もなにか、がれきの山だった。道路の山側と海側で全く違う景色だった。

同じ町内でも、ほとんど被害のない人と全てを失った人がいた。

被災された方は突然与えられた全ての希望を失うような厳しい環境で黙々と片付けをしていた。

いわき市水道局の指揮下に入り、応急給水活動（給水車を利用して水道水を配る）をした。

マイクで給水車が来たことを知らせ集まった人たちに水を配った。

集まった人たちは悲惨な目に遭っているにもかかわらず元気で明るかった。

遠方から来てくれてありがとうと感謝の言葉をもらい、逆に励ましてくれた。

お菓子や缶コーヒーをくれた人もいた。

被災された方たちを見ていると、余震や放射線は気にならず、頑張らねばと思った。

上下水道局計画課 藤村 和生